巻頭言

横浜国立大学研究推進機構
機器分析評価センター
センター長　栗原　靖之

新型コロナ感染症の猛威は未だ冷めていませんが、世の中は徐々に正常に戻りつつあります。大学も通常通りの対面講義となり、キャンパスに学生の活気が感じられるようになりした。教員として、ここ数年のぽっかりと抜け落ちていた学生と接することの喜びが戻ってきたようです。学内外の会議はだいぶオンラインに移行したことで、良い部分もあったなと感じられます。

この大変な状況の中、機器分析評価センターは大学の教育研究力を基盤で支える組織として、教職員一同力を合わせて機能の維持と向上に努めてきました。お陰様で、センター利用者も回復傾向にあります。機器分析評価センターが学内の教職員や学生の教育研究に理想的な環境を提供できるよう引き続き皆さんのご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

さて、私がセンター長の任について７年が経過しました。この７年間の間に出来たこと、出来なかったことがあります。任について最初の頃は、機器分析評価センター運営の適正化が大きな課題でした。これはセンター専任教員の谷村先生のご尽力もあり、大きな改善が見られ、センターが管理する機器が多くの利用者の教育研究活動に大きな貢献ができるようになったと考えています。次に、国からの運営費交付金が縮小しつつある中、大学予算も厳しい状況の中で外部収入を増大させ、機器の更新や新規導入に充てる試みも行ってまいりました。これは少しずつ実を結びつつあり、外部収入も増加し、いくつかの機器の更新に成功しました。また今後さらに増加させられる態勢も整えることができたことはさらに期待を抱かせます。今年度は、研究基盤機器整備の大学方針の策定に力を費やしてきました。これは、文科省が求めている「経営基盤として研究基盤設備機器を捉え、戦略的に整備する」に応える大学の覚悟を示すものです。この方針の中で大切な基本原則は、「教育研究に設備機器を最大利活用できる環境を整える」ことを明確に打ち出したことです。この方針をもとに、この基本原則を誠実に実現する努力を積み重ねていかなければなりません。来年度以降、このやり残したことを実現させ、さらに皆さんの教育研究に役立つ機器分析評価センターになれるように皆さんのご協力をお願いいたします。